

レイプ神話受容と被害者-加害者の 関係によるレイプの 責任判断に関する研究

北風菜穂子*・伊藤武彦**・井上孝代***

Rape Myth Acceptance and Judgments of Responsibility in Perpetrator-Victim Relationship

Nahoko KITAKAZE, Takehiko ITO,
and Takayo INOUE

This study investigated the rape myth acceptance (RMA) and the different types of rape. A total of 444 undergraduate students were asked to complete the Rape Supportive Attitude Scale and judge the four sets of rape scenarios. The participants with high RMA scores attributed more responsibility on victims, lesser responsibility on perpetrators, and lesser seriousness on victim's traumas than those with the low scores. Similar patterns of relationships were found on the date/acquaintance rape situations as compared to the stranger rape situations. The present findings showed the importance of promoting the rape-related educational programs in order to reduce the RMA.

key words: Rape myth acceptance, Victim blame, Date/acquaintance rape

問題と目的

近年、日本の若者における知り合い間、あるいは親密な恋人間におけるデートレイプの被害は看過できない状況にある。成人女性の7.2%に「異性から無理やりに性交された経験」があり、約9割が知人からの被害であった(内閣府, 2006)。顔見知りからのレイプは、社会に遍在する深刻な問題であるにもかかわらず、周囲のレイプに対する認識が低い場合やある種の思い込みが存在すると、被害者は自らの体験を語る場面でかえって責められたり、適切なサポートを得られないことがある(Ahrens, 2006)。

本研究では、レイプ被害者への非好意的な態度であるレイプ神話受容(Rape Myth Acceptance: 以下, RMA)に焦点をあてた。レイプ神話は広く社会に流布しているが、

「女性は潜在的にレイプされることを望んでいる」など、多くは事実と異なる誤った信念である。特に知り合い間のレイプにおいて、被害者を責め、心的外傷を過小評価する傾向にRMAが影響することが先行研究から明らかになっている(例えばFrese, Moya & Megias, 2004)。顔見知りからのレイプは、専門家や研究者の関心こそあれ、一般人においては、「レイプにあたらない」とする傾向が強いことが示されている(岩崎, 2003)。RMAに関する実証的な研究は極めて少なく、さらなる研究の蓄積が必要である。本研究では、知人レイプ、夫婦間レイプ、デートレイプを含むレイプの被害状況とRMAが、レイプの被害者、加害者それぞれの責任の認知、および被害による心的外傷の度合の推定に及ぼす影響を示すことを目的とする。

仮説1 RMAの高い個人は、RMAの低い個人に比べて、レイプの被害者の責任を大きく認知し、加害者の責任を小さく認知し、心的外傷を小さく推定する。

仮説2 知人、夫婦、デート場面では、未知場面よりも、レイプの被害者の責任が大きく認知され、加害者の責任が小さく認知され、心的外傷が小さく推定される。

仮説3 知人、夫婦、デート場面では、被害者の責任の認知、加害者の責任の認知、心的外傷の推定にRMAの高低による差が認められる。未知場面においてはRMAによる差は認められない。

方 法

調査対象・期間: 2007年11月に首都圏私立大学の学生450名を対象に質問紙調査を行った。有効回答数は444名(男性277名, 女性167名, 平均年齢20.09歳, $SD = 1.59$)であり、有効回答率は98.67%であった。

質問紙の構成: ①レイプ被害者に対する好意的な態度(RMAを含む)を測定する「翻訳版RSAS」17項目(Lottes, 1998, 片岡・堀内・森沢, 2001), ②四つのレイプ場面のスクリプトとそれに対する「レイプの社会的認知」を問う12項目(Frese et al., 2004)であった。

手続き: 倫理的な配慮のもと、調査への同意を得られた方を対象に大学の授業時間に質問紙を配布・回収した。

結果の分析: 本研究では、RSAS得点を平均値で2群に分割し、便宜上、RSAS下位50%をHigh RMA群、RSAS上位50%をLow RMA群とした。RMA高低(2)×性別(2)×レイプ場面(4)を独立変数とし、被害者の責任の認知、加害者の責任の認知、被害者の心的外傷の推定の3変数を従属変数として分散分析を行った。

結 果

1. 被害者の責任の認知 (Figure 1)

被害者の責任の認知は、RMAの主効果($F(1, 440) = 58.13, p < .001$)、場面の主効果($F(3, 1320) = 286.71, p <$

* 明治学院大学大学院
Meiji Gakuin University

** 和光大学
Wako University

*** 明治学院大学
Meiji Gakuin University

.001), および性別の主効果 ($F(1, 440)=5.62, p=.018$) が有意であった。High RMA ($M=2.0, SD=.60$) > Low RMA ($M=1.64, SD=.54$) であり, 男性 ($M=1.91, SD=.55$) > 女性 ($M=1.78, SD=.56$) であった。場面の主効果については多重比較を Bonferroni の補正により行い, 四つの場面すべてに有意な差が認められた ($p<.05$)。知人レイプ ($M=2.70, SD=1.08$) > デートレイプ ($M=1.89, SD=0.87$) > 夫婦間レイプ ($M=1.69, SD=0.87$) > 未知レイプ ($M=1.20, SD=0.59$) であった。RMA と場面の交互作用は認められなかった。

2. 加害者の責任の認知 (Figure 2)

加害者の責任の認知は, RMA の主効果 ($F(1, 440)=49.28, p<.001$), 場面の主効果 ($F(3, 1320)=114.26, p<.001$) が有意であった。High RMA ($M=4.24, SD=.64$) < Low RMA ($M=4.65, SD=.58$) であった。場面の主効果については, 多重比較を Bonferroni の補正により行い, デートレイプと知人レイプの間以外では有意な差が認められた ($p<.05$)。夫婦間レイプ ($M=4.14, SD=1.00$) < デートレイプ ($M=4.29, SD=.83$), 知人レイプ ($M=4.38, SD=.82$) < 未知レイプ ($M=4.88, SD=.50$) であった。RMA と場面の交互作用は認められなかった。

3. 被害者の心的外傷の予測 (Figure 3)

心的外傷の大きさの予測では, RMA の主効果 ($F(1, 440)=49.28, p<.001$), 場面の主効果 ($F(3, 1320)=184.61, p<.001$) が有意であった。High RMA ($M=3.98, SD=.66$) < Low RMA ($M=4.44, SD=.58$) であった。場面の主効果については多重比較を Bonferroni の補正により行い, デートレイプと知人レイプの間以外では有意な差が認められた ($p<.05$)。夫婦間レイプ ($M=3.82, SD=1.02$) < 知人レイプ ($M=4.03, SD=.88$), デートレイプ ($M=4.04, SD=.95$) < 未知レイプ ($M=4.85, SD=.51$) であった。RMA と場面の交互作用は認められなかった。

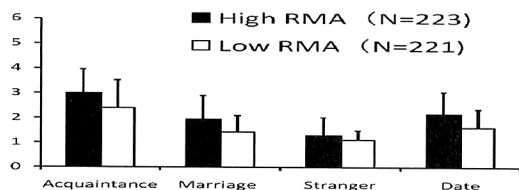


Figure 1 RMA の高低による被害者の責任得点の比較

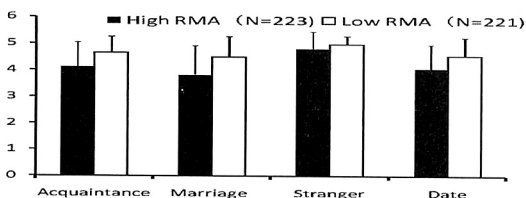


Figure 2 RMA による加害者の責任得点の比較

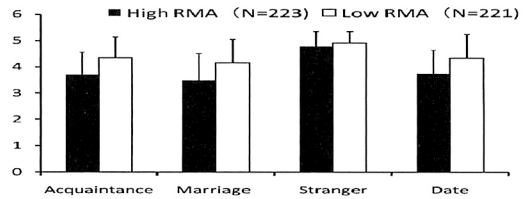


Figure 3 RMA の高低による心的外傷の推定得点の比較

考 察

結果から, レイプ神話受容の高い個人は, 被害者の責任を大きく認知し, 加害者の責任を小さく認知し, 被害者の心的外傷の度合を小さく推定することが明らかになり, 仮説 1 は支持された。したがって, レイプ神話がレイプを矮小化・正当化する働きをもつことが示された。

また未知場面と比較すると知り合い間レイプのほうが, 被害者を責める度合いが大きく, 加害者の責任が小さく, 心的外傷は小さく認知されたため, 仮説 2 は支持された。これは被害者の落ち度が責められて, 加害者を免責し, レイプによる精神的影響が過小評価されることに被害者-加害者間の関係性が影響することを表しているといえる。また Frese et al. (2004) では, レイプ神話受容と場面の交互作用が認められたが, 本研究では認められず, 仮説 3 は支持されなかった。

以上のことから, 日本の大学生においては, 個人のレイプ神話受容の強さと被害者と加害者の関係という 2 つの要因が, レイプの判断に影響を与えることが示唆された。性交渉の強要に対して被害者が責められ, 加害者が免責される状況は, 広く社会一般に流布している偏見やステレオタイプの思い込みによって助長されていることが実証的に明らかになった。

引用文献

- Ahrens, E. C. 2006 Being silenced: The impact of negative social reactions on the disclosure of rape. *American Journal of Community Psychology*, 38, 263-274.
- Frese, B., Moya, M., & Megias, J. L. 2004 Social Perception of Rape. How rape myth acceptance modulates the influence of situational factors. *Journal of Interpersonal Violence*, 19, 143-161.
- 岩崎直子 2003 性被害の心理と支援に関する研究 人間科学研究, 5, 301-308.
- 内閣府 2006 男女間における暴力に関する調査.
<http://www.gender.go.jp/e-vaw/chousa/images/pdf/h18report2-5.pdf>

(受稿: 2008. 7. 17, 受理: 2009. 1. 27)